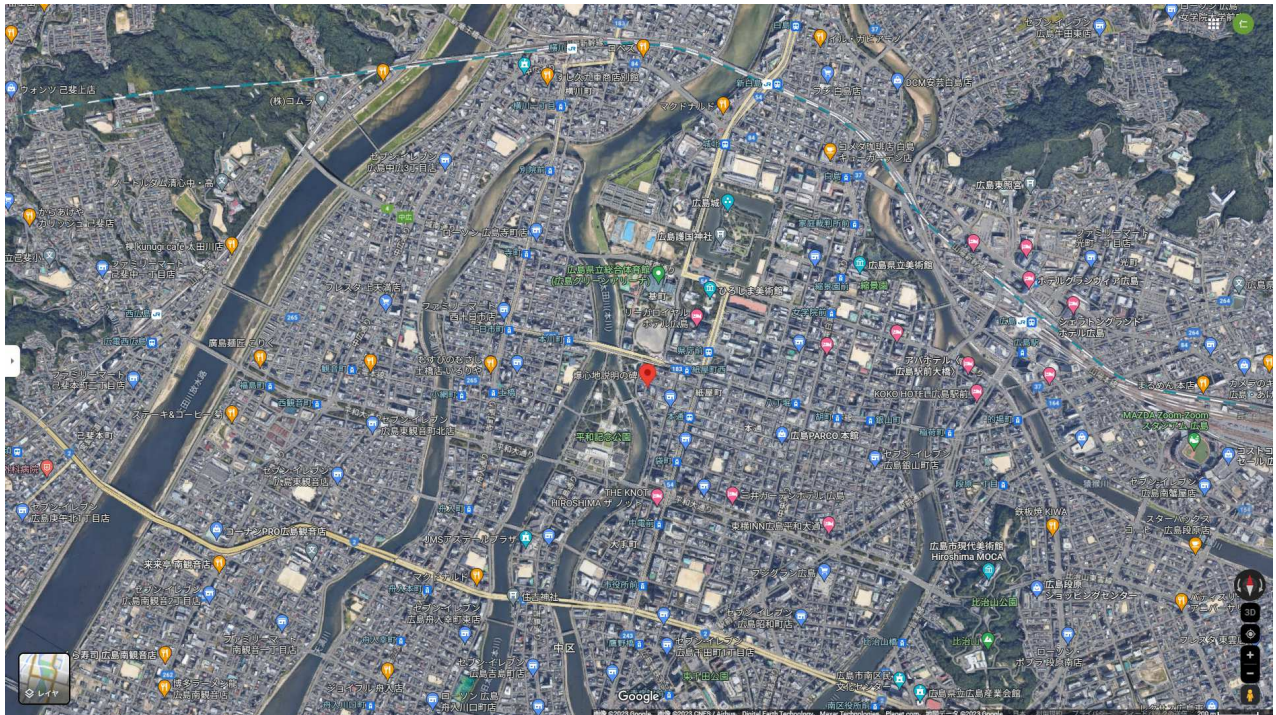


広島市 (Hiroshima)

人口109万3000人(1990年)



現在の広島市中心部。中央赤い点は、爆心地。原爆ドームの東側百メートルに位置する。

1986年8月初め、大分県国東在住の友人を訪ねたのをきっかけに、九州北部を巡る旅をした。そして8月5日夜、新幹線で初めて広島入りした。

原爆が落とされた街

広島は私にとって、幼い頃からいつかは必ず訪問しなければ、と思っていた街だった。毎年8月の原爆記念日が近づくと、テレビでは決まってその日にこの広島で何があったかを告げる番組が放映されていた。それらはたいがい、白黒の記録フィルムを通して生々しく伝わって来る戦慄のメッセージであった。幼い頃、私はこの凄惨な映像を見つめることによって、人が「核時代」に生きるが故に生ずる言い知れぬ存在の不安、そのような恐れを抱いたものだった。しかし、やがて社会的な関心を抱くようになると、この日は私にとって平和の気持ちを新たにさせる日となり、また戦争という

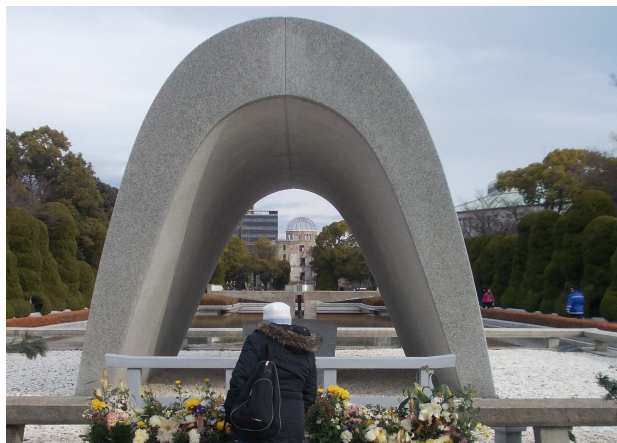
惨(むご)い現実の犠牲となった人々を心の中で追悼する記念の日となった。同じ8月でも6日の午前8時15分は、私にとっては15日の正午以上に、その場に立ち会わねばならない重要な時として意識されていたと思う。だからこそ6日の朝には必ずテレビのスイッチをひねったものだった。一方、機会があればいつかは広島を訪問し、記念式典の場に自らも参加し、平和を祈念しそれを胸に刻み込もう、そういう気持ちが募っていた。

その広島についてやって来た。駅ビルの上のホテルには、明日のために全国からやって来たネッカチーフを付けた民主団体とおぼしき少年少女が集っていた。その喧噪を掻き分けてフロントに尋ねると、幸いキャンセルの部屋があるという。窓下に広島駅のホームを望むその北側の暗い部屋で、朝を待った。

平和祈念式典に参列

7時半に起床。記念式典に間に合うよう身支度を整え、直ぐにホテルを出て、駅前のターミナルからバスに飛び乗った。その日の広島は41年前のあの日と同様、夏空の広がる晴天であった。バスの中は式典に向かう人も多いらしく混雑しており、「平和記念公園」のバス停まで来ると、乗客はどっと吐き出された。足早に「平和記念資料館」のピロティをくぐって会場に入ると、用意された椅子席は既にほぼ埋まっており、その中から目ざとく見つけた空席に腰掛けた。式典は既に始まっていた。会場は野外とは言え、人息れのする暑さで、あちこちで扇子を振る人の姿があった。内閣総理大臣に始まって代読者ばかりの通り一遍の挨拶が続いた後、あの8時15分になった。被爆者代表が進み出て「平和の鐘」を打ち始めると、黙祷の合図と共に辺りはしばし沈黙に包まれた。その鐘の物悲しい響きだけが、会場にこだましていた。黙祷が終わると、荒木広島市長が進み出て恒例の「平和宣言」を発表し、平和の象徴＝鳩が放たれ、閉式へと向かった。参加者は三々五々、公園の彼方に散って行った。初めて参加した式典だったが、それは残念だが、私が期待していたほどのものではなかった。何と無く物足りなさを感じながら、献花が積み重なった「慰霊碑」の前で合掌し、その向こうに「平和の灯」を見て、さらに原爆ドームを望む公園の北側へと向かった。

次の目的地は、ここから程遠くない市内八丁堀の広島YMCAだった。広島には院生時代の友人Rがおり、あらかじめYMCAで当日に行く『原爆被害者証言のつどい』に出ることを薦められていたのだ。爆心地の直ぐ



原爆死没者慰霊碑の奥に原爆ドームを見る

南を東西に走る商店街、「本通り」を東に向かう。このアーケードの賑わいを見る限り、被爆地の面影は皆無と言って良い。そこには原爆記念日当日とは言え、平和な光景が広がっていた。八丁堀交差点から一本奥に入った通りに、YMCAの看板が見えて来た。ここも今は夏期講習に通う予備校生の談笑する声が響いている。YMCA会館に入ると地下の集会室に案内され、数人の小グループ毎に証言者が割りあてられた。私が聞いたのは、被爆当時広島駅北側にあった国鉄の管理局に勤めていた久保浦さんの話だった。

被爆者からの体験を聞く

広島駅は、爆心地からちょうど2キロの距離にある。当日の朝、管理局二階の事務室で働いていた久保浦さんは、一階の事務室を見下ろした時にその瞬間を迎えた。閃光がひらめいたかと思うと、物凄い爆風が襲って来て建物は窓という窓が破れ、気がついた時には事務室の隅に投げ出されていたという。体の大部分に傷とやけどを受け、よろよろと立ち上がって辺りを見回すと、建物は全壊を免れたものの半壊状態で、使いものにならなくなっていたという。虫の息になっている同僚の姿を見て事態の重大さに気づいたが、気掛かりはやはり家族の

安否だったという。駅の南方を1キロ程行った比治山の麓に家があったので、早速そこへ向かった。



戦後間もない頃の被災した広島駅

駅のホームには、たまたま入線中で被災した木造電車が、火炎を上げて燃えていたそうだ。よろめく足で家まで戻ったが、ここも被災しており、その日は夕刻まで心当たりの場所を歩き回ったという。途中降って来た黒い雨がどんな危険を内包しているのかも知らずに、それを浴びながらも歩き続けたという。しかし気がつくと、自らも救護所で人の助けを借りねばならぬほど衰弱していたという。しかも、ここも危険だから市外に避難した方が良いと言われ、翌日からは避難を開始。北の三次方面の山間部の救護所に移ったという。しかしここに集った人々は衰弱が激しく、今日もまた一人また一人と死んで行き、あたかも死体安置所の様だったそうだ。横に並んだ被災者が息絶えたかと思うと、間もなくその屍にうじがわき、体のきかない自分ではどうにもできない事がやるせなかったという。話しは段々と熱を帯びていった。

久保浦さんはここでどうにかこうにか死線を越え、顔や腕に一部ケロイドを残しつつも今こうやって皆さんの前で証言できるのだと言い、原爆の悲惨さと平和の尊さを

語って、話を締めくくった。途中、このイベントをニュースにするために、地元中国放送のテレビカメラが部屋に入り眩しいライトを浴びせたが、真に迫る証言者の言葉は最後までその語気を衰えさせなかった。私はこの話を聞いて初めて、広島に来て良かったと思った。こちらもいささか顔を紅潮させて、会場を後にした。

広島でのR嬢

一階のロビーまで来ると、運良くRと出会い階上の職場に案内された。彼女とは、大学時代以来久し振りの再会だった。当時も今も東京の大学に通いながら、この広島YMCAが運営している「平和研究所」に勤めている※1。彼女が国際関係論と平和研究をライフワークにしているのには、訳があった。米国カリフォルニア、ロサンゼルス市のユダヤ人社会に育ったRは、その出自故に人権や平和の問題には鋭かったが、東部コネティカット州の名門大学に進む頃までは、家庭的に恵まれ順風満帆の人生だったそうだ。しかしその後、キリスト教に改宗するという心理的葛藤に遭遇し、一方で両親が離婚という辛い試練を経験した。何かを振り切るようにYMCAの職員となり、この極東の地方都市に派遣されて来たのだという。そこで初めて「広島」に出会った。

それは原爆を落とした側の国民であるという自責の念も含めて大変なショックだったそうだ。意外かもしれないが、つい十年位前まで米国の平均的な市民にとって、核の脅威はそれほどピーンと来るものではなかったのだ。何かをしなければ、そういう思いが彼女を奮い立たせ、実践的な平和運動家としての道を歩ませた。ということだったようだ。実際、原爆記念日を前後にし

たこの時も、忙しく飛び回っていた。研究所の中で暫く歓談した後、活動報告の資料を何部かもらい、今夜厚生年金会館で開かれる記念コンサートのチケットも宜しかったらと貰うことができた。その同じ場所で午後に行われる広島市主催・国際連合後援のシンポジウムに行く予定だったので、こちらの方も都合が良かった。

原爆記念公園周辺

広島での滞在は、明日の昼までと予定していた。宿泊事情の良くない広島のこと、差し当たって今夜の宿を確保する必要があった。Rから紹介された近くのホテルに予約を入れることができたので、そちらに荷を移すことにした。八丁堀から広島電鉄の市電に乗り、駅まで戻りまた取って返した。それから今度は電車通り沿いに相生橋のたもとまで行き、平和公園の中を歩いて厚生年金会館へと向かった。橋の手前右側には広島市民球場がデーンと構えている。**※2**



原爆ドームは戦前、産業奨励館だった。

ちょうどその向かいが、けさほど一瞥して来たあの原爆ドームだった。かつては産業奨励館として見本市等の華やかな舞台だった

この建物も(設計者は何とヨーロッパ人!),戦後はご存知のとおり被爆のシンボルとなっている。爆心地間近にあった為に爆風が垂直方向に降り凄まじい破壊を引き

起こしたが、円蓋の屋根が吹き飛んだおかげで倒壊は免れた。醜い相貌を剥き出しにしながら、それでも屹立している姿は余りに痛ましい。人出の多いその下を元安川沿いに、シンポジウムの会場に向かった。

広島厚生年金会館にて

平和公園の南数百メートルの所に、新築の厚生年金会館は建っていた。**※3**『86年平和サミット in ヒロシマ』と銘打ったそのシンポジウム会場に入ると、壇上にはテレビ放映のためか見栄えの良い演壇がしつらえてあった。この催しには米国の科学者ライナス・ポーリング氏や反アパルトヘイトの運動家としてノーベル平和賞を受けた南アのデズモンド・ツツ主教ら壮々たるメンバーが参加していた。ただ会議の進行は、今が核軍縮の好機だという認識では一致したものの、具体論が充分でなく何と無く物足りない結果に終わった。

その中で、日本側からもう一つの被爆都市代表として参加した長崎市長の姿は印象的だった。米国の科学雑誌『アトミック・サイエンティスト』が掲載する「核戦争開始の時計」が、先頃対に3分前を指してその表紙を飾ったことを引用しながら、この人は、「世界各地を旅してみてもこの時計が象徴するように核の危機はその様相を深めるばかりで悲観的にならざるを得ない」と語っていた。その悲観論の当否はともかく、一地方都市の首長にしてはなかなか学のある人だなあと感心したものだ。本島等長崎市長、その人だった。

夜は夜で、この同じ会場で開かれた『平和コンサート of the 夕べ』を聞きに行った。広島交響楽団の演奏した交響曲「HIROSHIMA」は、作曲者團伊玖磨氏本人の臨席もあって

なかなかの出来栄えだった。そんな興奮もさめやらぬまま、会館を出て帰り道を元安川の方にとってみると、川べりでは涼風を受けながら浴衣着の家族連れが灯籠流しを行っていた。もともと、あの日に水を求めてこの川に殺到した被爆者がそのまま息絶えて行ったことを弔う為に始まった行事だが、人手のせいか私の目には何と無く夏の風物詩のように映った。淡い蠟燭の光が水面を美しく照らし、灯籠はゆっくりと元安川を流れて行った。

平和資料館で見た「石段の人影」



爆心地に近い紙屋町、銀行前の「石段の影」

一夜明けて7日午前、ようやく静けさを取り戻した平和公園の平和記念資料館を訪ねてみた。展示されているものの一つ一つを丹念に見たが、私にはここでどうしてもこの目で確認したい物があつた。それは資料館の出口の所に置かれていた一塊の大理石であつた。何かしら重い気分を抱いたままこの石と対面した。ガラスケースに入ったその説明書きには、「爆心地から東にわずかの紙屋町、住友銀行入り口石段に残った人影」とあつた。

真ん中の黒い斑点は、確かに人が右足を

伸ばし、左足を立てひざにしていたように見える。あの原爆が落とされた朝、銀行の開店を待って一人の人がここに腰掛けていた。爆心地の方を向いていたこの人は多分、米軍機が去って空襲警報が解除された後の夏空にひらひらと何かが落ちて来るのを見ただろう。次の瞬間それは炸裂し、同時に直径百メートルに達する火球が出来、それは数千度の熱を帯びた。だから一瞬の内にこの人は骨さえも残さず灰のように飛び散ったのではないかと想像されるのだ。その一瞬に焼き付けられた影がこれなのだ。これ程までに原爆の恐ろしさを語るものはない。実際のそれを見て、私は改めてこう思わずにはいられなかった。

広島にやって来てそう思ったのは私ばかりではなかった。昨日の記念式典の終わりに荒木武広島市長が語った平和宣言の中で、ほんの一節だが故パルメ・スウェーデン首相の言葉が引用されていた。ウーロフ・パルメ氏は1981年12月初旬、軍縮と安全保障に関する独立委員会（パルメ・コミッティー）の一行を率いて広島を訪れた。その際、資料館でこの人影を見て、同行した荒木氏に「核戦争が起こればこの人影すら残らないだろう」と語ったという。当時の新聞を読み返して見ると、メンバーのガルシア・ロブレス元メキシコ外相は、「忘れ難い経験だ。何を言っているかわからない位だ」と語り、いまやゴルバチョフ大統領のブレーンとも言われるソ連のゲオルギ・アルバトフ米加研究所長は、「広島は人類にとって、（核戦争が）最後の破壊を意味することを教えてくれた」と語ったという。

アルバトフ氏について言えば、私自身、広島訪問を告げた当時のテレビニュースの

中で、青ざめた表情でこの人影の前に立っていたのを今でもはっきりと覚えている。その後のソ連がペレストロイカの下で、「全人類的価値が、階級闘争に優先する」という新思考外交を展開して行くのも、こうしたソ連の指導層の『広島体験』がそれに預かっているのではと考えるのは、あながち間違いとも言えないのではないか。帰するところ、「百聞は一見に如かず」なのだという思いが残った。



資料館の市街地模型。火球の位置で爆発した。

平和公園は、その日も鳩が餌をついばみ、芝生は夏の陽を浴びてその緑を輝かせていた。ただ私の目には、先程の石段の人影が暫く目に焼き付いたまま離れなかった。時間の制約もあったので、ホテルに急ぎ部屋を引き払い駅へと向かった。次の訪問地は、隣県岡山の倉敷だった。新幹線の椅子にもたれながら、私はこの初めての『広島体験』を心の中で反芻(はんすう)していた。

※1 Rは、1994年現在、神戸大学で国際関係を講じる教員となっている。また平和研究所は、YMCAの事業見直しにより閉鎖され、委員会として一部イベントを引き継いでいる。

※2 広島市民球場は、2009年春、広島駅東側に移転して、マツダスタジアムとして再出発している。

※3 厚生年金会館は、民営化され現在は『広島文化交流会館』となっている。

掲載写真は、広島駅の白黒写真を除き、2013年に広島再訪の際、写したもの。